

Progress Report

震災復興リーダー支援プロジェクト
平成28年熊本地震 復興支援
(2016年4月～2016年10月)

2016年12月19日
【発行】 NPO法人ETIC.

ご支援へのお礼

平素は、NPO法人ETIC.の事業に格別のご高配を賜り、誠にありがとうございます。
ございます。

平成28年4月に発生した「平成28年（2016年）熊本地震」の支援活動には、
日本全国の多くの皆さまから温かいご支援をいただきました。この場をお借
りし、心から感謝申し上げます。

地震から半年以上経った今でも、現地では多くの方が不自由な生活を送っ
ており、震災前の生活に完全に戻るには時間を要する状況です。そのような
状況の中でも「元に戻るのではなく、新しい熊本を創りたい」と立ち上がる
熊本の方々の挑戦を支え、そして一緒に取り組んでいくことが熊本の復興を
加速させることに繋がっていくと考え、現地の団体と連携してこの半年間、
支援活動を行ってまいりました。

特に東日本大震災での支援経験を生かし、一般社団法人フミダスとともに
「熊本復興・右腕プログラム」を立ち上げました。こうしたプログラムを進
化させ、また熊本に根差した団体である一般社団法人フミダスと共に取り組
んでいくことで、一過性ではない支援を行いたいと考えております。

NPO法人ETIC.では、今後も支援活動を継続してまいります。この度、
震災から6か月間の支援活動をまとめた報告書を作成いたしましたのでご報
告いたします。

皆様からいただきましたお力添えを今後も熊本の復興に生かし、挑戦を加
速させる取り組みを行ってまいります。今後とも、温かいご支援、ご協力を
よろしくお願い申し上げます。

平成28年12月19日
NPO法人ETIC.

ご支援へのお礼

この度は「熊本復興・右腕プログラム」へのご助成・ご寄付・ご後援を賜り、誠に有難うございます。

皆様方の温かいご支援に、あらためて心より厚く御礼申し上げます。

熊本地震から半年一。インフラも復旧し、人々の生活も回復したかに見える熊本。しかし、今も至るところに全壊した家屋や傾いた電柱、隆起した道路がそのまま残っており、町の風景は地震直後と変わらないままです。加えて、今回の阿蘇山の噴火により農業や観光を中心に各産業がさらに大きなダメージを受けており、再建に向けての課題は山積みです。

先行きが不透明な状況が続く中、「自分たちの力で何とかしてやろう。」という負けん気の強い熊本県人元来の気質で、熊本の復興のため、未来のために立ち上がろうとしているリーダーたちがいます。しかし、そのリーダーたち自身が被災していたり、またあまりにも多くの依頼が舞い込んでいることによって、円滑に事業を遂行できていないという現状にあります。

だからこそ、いま、「立ち上がろうとしている人たちに希望の光を。」という想いで「熊本復興・右腕プログラム」を推進しています。

当プログラムの拠りどころとなるのは、熊本地震による緊急性の高いテーマや、社会貢献性、地域社会への波及効果等の視点で今こそ応援すべきミッション・ビジョンを描いているリーダーとの出会いです。皆様よりご助成をいただいていたことで、メディアでは得られないリアルな情報を得るために現地パーソンを訪問することができ、再興への取り組みや方向性を確認し、プロジェクト達成に向け伴走するなど、丁寧なコーディネートが可能となりました。

震災から半年が経ち、世間の関心が薄れつつあるなか、こうして皆様よりご助成いただけること、事務局一同深く感謝致しております。

「熊本復興・右腕プログラム」が考える熊本の「復興」は、「受けたダメージを元に戻す」ことではなく、「『危』を『機』に変えて地域のレベルを上げて再興する」ことだと捉えています。

フミダスはこれからも、課題解決にチャレンジしようとする熊本のリーダーのもとへ、リーダーの「右腕」となれる人材を送ることでリーダーの挑戦を加速させ、熊本を再興させていきたいと考えています。どうぞ、今後ともお力添えのほどよろしくお願い申し上げます。

一般社団法人フミダス
代表理事 濱本伸司

H28年熊本地震の概要

1. 概要

	前震	本震
発生日時	H28年4月14日 21時26分	H28年4月16日 1時25分
震央地名	熊本県熊本地方	同左
マグニチュード	6.5	7.3
震度7 観測自治体	益城町	益城町、西原村
震度6強 観測自治体	なし	熊本市、菊池市、宇土市、 宇城市、合志市、大津町、 嘉島町、南阿蘇村、
震度6弱 観測自治体		八代市、玉名市、上天草市、 阿蘇市、和水町、菊陽町、 三船町、美里町、山都町、 氷川町

2. 被害について

※平成28年11月8日16時30分 熊本県災害警戒本部 発表資料より

	人的被害		住家被害
	死者	重軽傷	
被害状況	145人	2,516人	174,506棟 (内、全壊8,302棟)

【H28年4月17日時点】※最大時

【H28年11月8日時点】



震災発生から半年間の取り組み

Phase1：先遣隊チームの派遣・現地調査の実施



▲地震により倒壊した家屋（上）／フミダスとETIC.の
現地での打ち合わせの様子（下）

本震が起こった4月16日から数日後、ローカル・イノベーション事業部の10年来の連携パートナー団体である「一般社団法人フミダス」代表理事 濱本氏と電話で会談。現地の被害状況を把握するとともに、復興に向けて必要とされる支援について、相談を行いました。

その結果、下記2点の支援を想定し、現地の実際の状況把握およびフミダスへの事務局機能支援を目的として先遣隊を現地に派遣しました。

【想定支援内容】

1. 一般社団法人フミダスの事務局支援
2. 緊急支援活動を支えるリーダーの右腕コーディネート

【先遣隊スタッフ・期間】

▶ 先遣隊（先発チーム）：

押切真知亜 4月29日～5月15日

川口枝里子 4月29日～5月15日

山元 圭太 4月29日～5月4日

（株式会社PubliCo 代表取締役COO）

※ETIC.からの依頼により、先遣隊として現地入り。

▶ 先遣隊（後発チーム）：

山本 絵美 5月9日～5月18日

土屋 望生 5月9日～5月18日

【先遣隊 活動内容】

1. 一般社団法人フミダスの事務局支援

フミダスは中長期的に復興に携わっていく意思を持っていましたが、フミダスのスタッフも被災者であり、自宅の半壊などの被害を受けている状況にもありました。そこでまずフミダス自体の事務局機能の支援が必要と考え、復興事業を軸とした2016年度事業計画策定を行いました。

2. 緊急支援活動を支えるリーダーの右腕コーディネートの仕組みづくり

東日本大震災やその他の災害復旧時の経験から考えると、短期的には緊急支援活動に取り組む地元団体が慢性的な人手不足に陥ります。そこで被災地のリーダーを支える「右腕」人材をマッチング・コーディネートする仕組みを作る事を決定。候補先団体へのヒアリングや今後立ち上げる「熊本復興・右腕プログラム」の枠組みづくりなどを実施しました。

3. 現地状況把握のためのヒアリング、リサーチ活動

地域コミュニティや産業の復興を目指すフミダスとともに、民間発の新しい仕組みを熊本に構築したいと考えています。そのために、メディアだけでは得られないリアルな情報を得るため、現地キーパーソンを訪問し、各個人の復興への取り組みや目指す方向性などを確認しました。

その中で、右腕を必要とする団体に対しては、「熊本復興・右腕プログラム」の受け入れを提案、実際にマッチング後も伴走するなどコーディネートを実施してきました。また、今回受け入れに至らなかった団体に対しても、中長期的な展望について共有し、お互いに考えを深めるとともに協力体制を構築しました。

震災発生から半年間の取り組み

Phase2：「熊本復興・右腕プログラム」の立ち上げ

5月初旬～中旬になると県内インフラの9割が復旧するなど、緊急支援はある程度、普及したといえる状態となっていました。その中で、一般社団法人フミダスと先遣隊チームでは、「今後起こりうる短中期の課題・ニーズ」を明らかにするべく、現地ヒアリングを実施しました。その中で見えてきた具体的な課題は下記の2点です。

① 多忙極まる被災自治体の人材不足

被災エリアでの勤務経験がない自治体職員が多い中で、多くの自治体では災害対策本部や避難所の設置などの緊急対応に追われていました。また様々なことを手探りで進めざるを得ない状況が続いたこと、更にその対応にあたる自治体職員自身が被災者でもあるという状況から、日ごとに疲弊が高まる状況でした。

② 県外からの支援団体の支援終了後におきる復旧・復興担い手不足

被災直後から各市町村には、東日本大震災の支援団体などが緊急支援として参画していました。避難所運営のノウハウやスペシャルニーズを持つ避難者支援など、高い支援ノウハウを持つ団体が入ることで円滑に進んだ業務も多く、またボランティア受入れ、土砂の掻き出しなど、人手が必要な箇所に多くの外部人材が入ったことは被災地にとって大きな助けとなっていました。一方で、そうした外部団体は、支援期間が限られていることもあり、外部団体が撤退した後の復旧・復興の担い手不足が懸念されていました。多くの外部団体は6月末での支援終了を表明していましたが、6月当時の被災地の状況は、避難所から仮設住宅への移行期でもあり、外部団体が行っていた支援を現地化することは難しいタイミングでした。

【復興リーダーを支える人材「右腕」のコーディネートを決定】

上記2点の状況を考慮し、短中期的（1か月～半年ないしは1年）という期間の中で、フミダスやETIC.のこれまでの経験・ノウハウを生かして復興を支援する方法として「熊本復興・右腕プログラム」の立ち上げが最適であると判断しました。

今後、時間の経過とともに、被災者の生活サポートや仕事の再開に向けた動きを支援する人材が必要となってきます。大震災後には、必ずそうした取り組みをするリーダーが生まれていきますが、そのリーダーを支えるチームづくりがさらに重要となっていきます。特に、高齢化が進んでいる熊本の内陸部においては、復興への歩みは中長期的なものになっていくことが予測されます。

九州・もしくは日本全国から右腕人材を募るとともにそのような仕組みを熊本に定着させていくことで、中長期的な復興を人材面から支えることを目指してフミダスとともに「熊本復興・右腕プログラム」を開始することといたしました。



▲地震により倒壊した宇土市役所（左）／倒壊した神社（右）

震災発生から半年間の取り組み

【熊本復興・右腕プログラム】募集開始

「熊本復興・右腕プログラム」－VISION－

復興に追い風を吹かせる「熊本復興・右腕プログラム」

「熊本復興・右腕プログラム」は熊本の地域課題解決に挑戦するリーダーのもとに、右腕となる人材を送り込むことでリーダーを補佐し、その挑戦を加速させ、事業推進していくというプログラムです。

また、「熊本復興・右腕プログラム」事業を通して、「社会の課題を解決する人材を熊本に増やしていくこと」を目指します。

熊本が抱える地域課題が、更なる難題となって姿を現した今回の自身。社会課題解決の担い手を増やしていくことが「これからの熊本」を創る最重要テーマであると考えています。行政にだけ頼ろうとするのではなく、民間だけでやろうとするのではなく、様々な人が関わり、「社会の課題解決の担い手」になっていくことを目指し、フミダスとして復興に取り組んでいきます。



▲「熊本復興・右腕プログラム」ウェブサイト

- ▶ ウェブサイト開設日
2016年6月17日
- ▶ 掲載プロジェクト数
4プロジェクト（※掲載スタート時）
- ▶ 主催
一般社団法人フミダス
- ▶ 運営協力
NPO法人ETIC.
チャレンジ・コミュニティ・プロジェクト

【右腕募集概要】

- ▶ 募集する右腕の人材像
 - ・現場で課題に取り組むことで、熊本の未来に貢献する仕事をしたい、自分の経験値や可能性を広げたいと考えている方
 - ・今までの自分のスキル・ビジネス経験等を活かして、熊本の復興に携わりたい方
 - ・地域の資源を生かした新しい価値創造・事業創出に興味のある方
 - ・社会人／学生、両方を想定しています。
- ▶ 活動支援金の考え方
社会人：上限18万円（ご自身で住宅を借りる場合+2万円）/月、学生：10万円/月
- ▶ 活動期間
半年～1年間（ただし、プロジェクトや団体・事業の状況、エントリーした右腕の希望によっては1ヶ月、3か月等の期間を認めることも可能です）

【受入先紹介】

益城町役場避難所対策チーム



エリア：益城町

■活動内容

益城町役場に震災後に設置された「災害対策本部」のチームの一つとして、避難者への対応及び避難所の運営、また仮設住宅への円滑な移行を業務として震災直後から活動を開始。

被災直後には、県内および県外の自治体より、職員派遣が実施され活動にあたった。避難所内の心身のケアをする看護師・介護士等の専門スタッフと役場職員でメンバーが構成される。

2016年10月中に全避難者を仮設住宅へ移行することが出来たため、避難所は閉設。

■課題、状況と右腕が入ったことによる変化

【課題】

- 看護師や介護士等、避難所の現場で動けるスタッフはいるが、バックオフィス業務を行うスタッフがおらず、情報共有や蓄積、引継ぎに支障
- 他自治体からの派遣職員が引き揚げ、全体的に職員への負担が増大していた



【変化（右腕が果たした役割）】

- 避難所にいる**避難者の個人状況を全て可視化**。現場スタッフが得る定性的な情報と合わせて適切な対応を行う基盤を整備した
- 会議の議事録等、作業時間を取りにくい作業を一手に引き受け、**情報の可視化や避難者向けのセンシティブな情報の伝達を丁寧に行えるよう**、事務機能を担った

■益城町について

- 人口：3.26万人
- 主要産業：農業（スイカ、メロン、市だご、柿）
- 熊本県の中部に位置する上益城郡の町である。



益城町役場避難所対策チーム

現場スタッフを支える「バックオフィス」。
データの見える化でスムーズな運営をサポートする。

■今のお仕事について教えてください。

益城町では、避難所から仮設住宅に徐々に移行していくフェーズにありました。ただ、避難者の方にはそれぞれの事情があり、すぐに移れる方もいれば、移るためにサポートが必要な方もいらっしゃいます。ソーシャル・ワーカーや看護師など専門職スタッフがチームにおり、避難者の方と直接やりとりする業務はその方が行っていましたので、私はその方々が円滑に業務を行えるよう、あらゆる裏方業務を担っていました。復旧・復興には非常にたくさんの方が関わります。その分、会議が多くなったり、参加できない方が出てくるなど、「どのように共有するか」という部分についての課題も発生しました。そこで議事録を丁寧に作り、新しく入ってきた支援者の方と円滑な情報共有を測ったり、避難者ひとりひとりの状況を可視化し、ソーシャル・ワーカーたちがそのデータを見ながら、その人に合わせた提案をできるように、基盤整備を行っていました。

■本プロジェクトに参画した理由はなんですか？

私自身は家が熊本市内にあるため、大きな被害を受けずに済んでいました。一方で、だからこそ他のエリアがこれほどまでに被害を受け、またそれが今に至るまで続いているということの実感を持ちにくい状況にあったんです。市内に住んでいる人は今になって少し落ち着いてきたとしても、被害が甚大だったエリアの役場職員の方々は、家に帰れなかったり、まだ大変な状況が続いています。本当は、4月の一番大変な時期にお手伝いをしたかたのですが叶いませんでした。だからこそ、私自身が少し落ち着いた状況になった今、何かお役に立てることがあればという強い気持ちがあり、右腕への参画を決めました。

■右腕として感じた課題と、これから必要になることを教えてください。

復旧期には他行政から職員派遣を受け入れていましたが、1週間単位で派遣され、入れ替わりでまた3人くる…という状況でした。引継ぎの文書はありましたが、円滑に引継ぎが出来ればもっと多くのことが出来るのに、と感じました。ただ、そのマネジメントを行う機能がなく、職員の負担にもつながっていたように感じます。役場的なノウハウを持った人に関わってもらうことで効率的な体制を整えることが必要だと感じました。また、今後は、防災の体制を整えていくことが大切になると感じています。色々な避難所になったところと協議をすすめ、どういう形が最善なのか。そこを考えられる人材が必要だと思います。

■今後の展望、やりたいことについて教えてください。

元々、本業が演奏会やアーティストの方々のコーディネートを行う仕事なので、その本業を生かして、仮設住宅やその他の場所で演奏会を実施するなど、コミュニティが出来ていくところにアート・音楽を取り入れていきたいと思っています。今回、右腕で現地に深く参画したことで、そのコミュニティのニーズや必要とされるものが良く分かりました。それを活かして復旧期の先に、「心の復興」に対する支援が得られるようにしていけたらいいなと思っています。



■坂口美由紀さん

元々、熊本の文化情報誌の編集・発行や舞台芸術公演のコーディネート業務など舞台芸術に関わる団体の代表として活躍。

■リーダーコメント：益城町役場避難所対策チーム 丸山氏



坂口さんには、バックオフィス関連の業務を一手に引き受けて頂きました。不足しがちな会議の議事録作成や避難所に掲示する資料の作成、また様々な支援スタッフへの情報共有の整理など裏方業務がメインです。この裏方業務をきちんとできたからこそ、**想定していたストーリーよりも早く**、仮設住宅に移行し、避難所閉所をすることが出来ました。坂口さんが作成してくれた「避難者の個人状況のデータ化」は、例えば「この人の自宅の倒壊状況はどうか」、「本当に仮設住宅に当たっていないのか」等に見える化するツールであり、現場のソーシャル・ワーカーたちがそのデータをもとに、実際の避難者の話を聞き、情報を照らし合わせていくことで「**本音と建て前**」を聞き分け、**実際に必要な支援を提供することができた**、というのが成果として非常に大きいと感じています。

本来は年明けまでかかると思込んでいた避難所閉所をこのスピード感で行えたのは坂口さんのバックオフィス業務のお陰が大きいと感じています。

【受入先紹介】

株式会社くまもと健康支援研究所（くまカフェ）



エリア：御船町（仮設住宅の3つの集会所を担当）

■団体ミッションと事業内容

「自立する力をサポートすることで、サービス受給者とまちを自分たちの手で元気にしていく」くまもと健康支援研究所は、高齢者への運動指導や栄養指導などを通じた介護予防事業を展開してきました。健康づくりと地域づくりをつなげた新たな取組みも行い、これを拡大しようとしていた時に起こったのが、熊本地震でした。避難者の持つ力に気付き、その力を活かしながら、健康と暮らしとコミュニティの立て直しにつなげていく。そのための仕掛けと後押しが、伴走者としての私たちに求められています。簡単なことではありませんが、多様なステークホルダーの立場を理解しながら、避難者の声を聴き、現実を動かす仕組みをつくることを目指しています。

■課題、状況と右腕が入ったことによる変化

【課題】

- ・くまカフェの認知度。知らないところへ参加するのは気持ちの壁がある。
- ・運営スタッフがその都度異なり、準備や実施内容の情報共有が不十分。

【変化（右腕が果たした役割）】

- ・くまカフェの顔として、地域が認識。運営サイド（くま健）と参加者をつなぐ仲介役として機能。
- ・オペレーション管理を行い、その日の担当スタッフから情報をヒアリング、全体への情報共有までの体制を整えた。

■団体概要

- ・ 設立日：2006/12/26
- ・ 代表者：松尾 洋
- ・ 事業内容：・ 介護予防サービス「自助、共助、互助が活きるまちづくり」・ 保健指導サービス・ コンサルティングサービス・ 施設管理・ 医療介護周辺サービス

くまカフェの「顔」として、運営側と利用者を同時に支える

■今のお仕事について教えてください。

御船町の仮設住宅の集会所で開催しているくまカフェ常駐スタッフとして通っています。3つの集会所を週1ずつ担当して、毎回の状況を把握し、くまもと健康支援研究所（くま健）の正規スタッフさんと共有した内容も含めて、日報として情報を整理・伝達するのがメインで、くまカフェの運営オペレーションから、実施する企画の考案を担当しています。

■何故、本プロジェクトに参画を決めたのですか？

熊本地震の復興支援に携わりたかったことが大きいです。一般的なボランティアを検討していた時に、過去にインターン生として働かせてもらっていたフミダスからいくつかプロジェクトを紹介していただきました。

■現地で働いていて感じたこと、必要とされている支援はどんなものですか。

地震をきっかけにひきこもりになって、外に出られてない人たちをどう来てもらうかが重要だと感じています。松尾社長には打ち手になる企画を考えて欲しいと言われているので、特に注力していきたいです。僕が松尾社長の目や耳となって、常駐スタッフとしてコンスタントな現地入りをして、その都度状況を報告をすることも大事だと感じています。くま健のスタッフさんも毎回担当が異なるので、全体を把握して課題への対策を実行するブレーンが現地には必要だなと。情報共有として日報を活用したり、運営の準備のマネジメントを行っています。僕は学生なので皆さん気軽に声をかけてくださいますし、運営側のくま健と、利用者の方々との仲介役になればと思っています。

■右腕として現地に入ってから見えてきた変化の兆しと課題について聞かせてください。

「くまカフェがあるから外に出られるようになった」と言ってもらえたり、利用者さん同士が助け合う場面を目にするようになりました。3箇所の集会所のうち、8月から始まっているくまカフェは利用者数が安定的に集まるようになって、菜園を企画するなど、利用者の方々が主体的に活動する動きが生まれています。

2つのくまカフェは開始から1ヶ月程度なので、課題は参加者の定着です。先にくまカフェはリーダー格の住民の方が周囲を熱心に誘ってくれたことが大きかったので他2つもそう言った協力してくれる方を見つけて、自主的な企画の活動をやりたいて思ってもらえるよう、どうやる気を引き出していかどうかも考えていきたいです。

■今後のくまカフェの展望、やりたいことについて教えてください。

あくまで僕の理想ですが、よい意味でスタッフがいない状態です。利用者さんから「今日、くまカフェでこういうことはできませんか」と言っただけのような、1つの自治会のような起点になれば。ひきこもりの方々への声かけなども住民の皆さんで続けられるように、くまカフェが機能できたらと思っています。



■城谷将太さん
熊本大学4年生。学生団体
KUMActive walkers共同代表として活動も。

■リーダーコメント：松尾 洋氏



最初に入ってくれた右腕の大庭くんは1か月間という短期間にもかかわらず、菜園看板作製や企画等たくさんの業務に従事し、くまカフェの基礎づくりに従事してくれました。次の右腕・城谷くんは多くの仮設団地に足を運び、大庭君が企画した支援企画のブラッシュアップとともに、現在の被災者ニーズに応じた企画の立案に従事してくれていて、くまカフェ支援スタッフを固定化できない会社事情の課題を、直接仮設団地に入ることにより、つなぎ役になってくれています。右腕が入ったことで、くまカフェ支援スタッフが100%仮設団地支援にエフォートできない状況の中、企画・実践・展開の部分で助けになり、また、これまでSNSで情報共有している中で伝わりにくかったことも右腕スタッフがハブとなって状況共有に貢献してくれました。

【受入先紹介】

株式会社南阿蘇ケアサービス



エリア：南阿蘇村内、阿蘇市内

■団体ミッションと事業内容

「利用者を人生の先輩として常に敬愛いたします」の運営方針のもと、地域高齢者のニーズに合わせた福祉サービスを提供します。

雄大な南阿蘇に癒され、人とのふれあいに幸福を感じ、心の器が満たされたとき、自然と笑顔がこぼれます。柔軟な事業展開をおこない、高齢化率35%の農村地域で安心できる暮らしの支えが出来る様活動を行います。

■課題、状況と右腕が入ったことによる変化

【課題】

- ・地震の影響でニーズが高まっていたが、既存事業が多忙を極め、リーダーがずっとやりたいと考えていた地域福祉コミュニティ形成への打ち手を進められていなかった
- ・多様なニーズに対しての施策を絞りきれなかった

【変化（右腕が果たした役割）】

- ・打ち手の第一歩：地域の居場所づくり「のんびり福幸（ふっこう）カフェ」をスタート。情報収集やキーパーソンとのつながり作りに活用
- ・ケアサービスの既存事業でできること、これから取り組むべきことを整理し、今後取るべきステップが見えてきた状態に

■団体概要

- ・設立日：2000/07/01
- ・ホーム長：荒牧 律子、副ホーム長：松尾 弥生
- ・事業内容：介護保険法の成立以来訪問介護、通所介護(定員18名)グループホーム(定員18名)有料老人ホーム(30戸)サービス付高齢者向け住宅(10戸)を各人の生活歴を尊重しながら運営しています。

地域で支え合う福祉を。コミュニティ形成の第一歩がスタート

■今のお仕事について教えてください。

地域の居場所づくりとしてこの10月から始めた、「のんびり福幸（ふっこう）カフェ」の企画・運営を担当しています。月8回開催予定なので、自治会を通じて全世帯にチラシを配布したり、周知をしていくところから始めています。右腕スタートから1ヶ月程度ですので、自分のことを地域の方に知ってもらうのと私自身が地域を知るために、朝、ジョギングしてできるだけ村に入っていくことを日課にしています。

■本プロジェクトに参加した理由はなんですか？

僕自身、関西の市社会福祉協議会で働いていた時から地域に根ざした福祉の在り方を模索したいと考えていたことと、みなみ阿蘇福祉救援ボランティアネットワークの活動に参加した際に松尾副ホーム長と出会い、「災害を機に地域に根付いた事業所をカタチにしたい」という熱量と覚悟に触れ、松尾さんの右腕としてプロジェクトに携わりたいと応募しました。

■現地で働いていて感じたこと、必要とされている支援はどんなものですか。

ケアサービスの既存事業のみだと社会的孤立者の情報はあまり入ってこないの、向こうから来てもらえる仕掛けが必要だと感じました。カフェを始めたのは、南阿蘇村の方々を対象に地域の問題を共有してどう解決していくか話し合いができる場が必要と思ったためです。ケアサービスの将来的な利用候補者のニーズ掘り起しにもつながりたいですし、社会的孤立をされている方はこちらから踏み込む必要があるの、例えば出張カフェなど私たちから地域に出て行く施策も必要です。地域福祉に対する意識が高まるよう、ケアサービスの役割を広げたいと考えています。

■右腕として現地に入ってから見えてきた変化の兆しと、課題について聞かせてください。

今、家に閉じこもっていたご近所の認知症の方が役割を持って、福幸カフェの手伝いを始めてくれています。その方のような要支援の方々は良かれと思い周りから必要以上に守られて外に出なくなるというケースが多いので、役割を持ってもらえる場所が定期的にあることはとても有益だと手応えを感じています。

素晴らしいことなのですが、南阿蘇村は昔からのつながりがある分個人の方々が点で動かれている印象で、地域全体で福祉を担っていくコミュニティが形成されて問題に対して常に伴走していける人材が必要です。私は外から来た人間なので、込み入った話をしてもらえるようカフェで接点を作ったり、地域に出て行き民生委員さんなどキーパーソンともっと会うことで、徐々に地域福祉のコミュニティの輪を広げていけたらと思っています。

■今後の展望、やりたいことについて教えてください。

私が右腕の役割を終えた後も続くように仕組み・事業にしていくことです。ケアサービスの役割をどう作れるかが鍵ですが、その動きの先に地域の困りごとを話し合うお茶会など、住民主導の活動がスタートするといいですね。



■勅使河原 航さん
福岡県出身。社会福祉士。
関西の市社会福祉協議会で
4年半の勤務経験を生かし、
右腕として活動中。

■リーダーコメント：副ホーム長 松尾 弥生氏



1ヶ月目として初めての土地でドキドキしてたと思いますが、ガツガツしすぎず、うまく切り込んでいますし、行動が早い。要支援の認知症の方が勅使河原さんと一緒に福幸カフェの準備しているのもとても素晴らしいことです。一方で、カフェに参加者が集まるようになり、彼らの相談相手になることを彼の仕事のメインにしていけたら、潜在ニーズの掘り起こしに注力していきたいと考えているので、見えてきた困りごとに対してどうするか、ケアサービスにいる様々な専門人材をどう活かすか、こういった連携等に力を使ってもらえたらと考えています。いよいよケアサービスが地域に飛び出します。ずっとやりたかったことが動き出したこと、非常に嬉しいです。

【受入先紹介】

西原村復興支援災害ボランティアセンター



エリア：西原村

■活動内容

被災後に、社会福祉法人西原村社会福祉協議会内に設置され、ボランティア受入れ、コーディネート業務を主業務として立ち上がりました。

被災直後から多くのボランティアを受入れ、また他市町村は県内ボランティアのみの受入れをするところが多い中で、県外ボランティアも積極的に受け入れており、震災から半年が経った2016年10月でも300人/月程度のボランティアを受け入れました。その他にも、村内の他組織と連携し、災害ボランティアセンターでは受入れが難しい申し出は村内の別組織とつなげるなど、コーディネート機能も担っています。

■課題、状況と右腕が入ったことによる変化

【課題】

- ・ 災害ボランティアセンターの運営経験がある職員がおらず、センター運営を担う人材がいなかった。
- ・ 他県からの応援スタッフたちが6月で撤退するため、運営を担うスタッフが大幅に減り、既存業務を回すことが困難であった。



【変化（右腕が果たした役割）】

- ・ 東日本大震災時のNPO現地駐在スタッフとしての経験を活かし、災害ボランティアセンターの運営ノウハウを現場とともに構築した。
- ・ 継続的に回る仕組みづくりを意識し、「災害ボランティアセンター」のロードマップづくりを行った。

■西原村について

- ・ 人口：6千人
- ・ 主要産業：農業（サツマイモ（甘藷）、サトイモ、ラッカセイ等）
- ・ 熊本県の阿蘇郡に位置し、南阿蘇観光の玄関口でもある。



西原村復興支援災害ボランティアセンター

現地で継続的にまわる仕組みづくりを。
東日本大震災の経験を活かした復興支援。

■今のお仕事について教えてください。

社会福祉協議会が運営する災害ボランティアセンターの組織づくりや実際の運営部分などを担っています。災害ボランティアセンターは村ごとにやり方が違い、どういう運営をするか、対象などの幅も違うため、西原村の状況に即したボランティアセンターとなるよう、決めていける体制づくりなどを行いました。実際に決めた後には職員さんと一緒にコーディネートするところまで従事しています。例えば、団体外への物品の貸し出しルールを作り、実際に円滑に回るところまで実施したり、社協がやるべきボランティアセンターの業務は何か？というのを、実際に舞い込んできた案件を受けながら整理していきました。

■本プロジェクトに参画した理由はなんですか？

元々、東日本大震災の際にNPOの現地駐在スタッフとして陸前高田市で支援活動に従事していました。そこでは災害ボランティアセンターの運営支援や市民活動センターの立ち上げ支援なども行っており、災害ボランティアセンターについてはある程度の知識や従事経験があったため、東北での経験を活かして熊本の役に立ちたい、という思いからエントリーを決めました。一過性の人手として関わるのではなく、組織が機能的に、継続的にまわるような仕組みづくりを行いたいと思っています。結局は現地の方々が出来るようになっていくのが一番良いと思っているので、「現地化」には最初からこだわり、この地に暮らす住民の方々にとって最も望ましいセンターの在り方を一緒に模索したいと思っています。

■現地で働いていて感じたこと、必要とされている支援はどんなものですか。

これから、災害ボランティアセンターは「災

害」の名前が取れて「ボランティアセンター」に移管します。更に「地域支えあいセンター」も発足し、復旧期から復興期に変化をしていく予定です。その中で、「こうした大きな組織が円滑に機能していくことを待つのでは間に合わない人」が生まれてきます。こうした方々を発見し、住民と良く話していきながら、声を拾っていく「ローカル・コーディネーター」といった職種の方が必要とされるのではと感じました。行政や大きな組織から示されている制度やこれから作られていくものに対して、住民の声を届け、反映をさせていく人。そんな人が地域の復興計画を進めていく際には欠かせない存在になるだろうと感じました。

■今後の展望、やりたいことについて教えてください。

その地域の人が、「自分の地域のことが好き」というのはとても素敵なことだと思っています。今まではそうした思いが強かったわけではありませんが、東日本大震災や今回の経験を通じて、自分の地元で何か出来たらいいなと思っています。地元の人が何か自分で出来るようになるのが一番いいと思うので、私自身もそこに根付くものがしたいなと思いましたし、身一つで入っても何か出来ることはあるんだという手ごたえを感じることが出来ました。



■船橋 和花さん

民間企業、認定NPO法人（東日本大震災支援）、公的機関での勤務を経て現職。東日本大震災では現地駐在職員として、岩手県陸前高田市にて同市災害ボランティアセンターや市民活動支援センターの運営支援を実施。

■リーダーコメント：

災害時の対応について経験がない職員がほとんどのため、東北で経験した流れを西原村に合った形で作ってくれたところが本当に助かりました。特に、東北で培われた支援NPOの繋がりや情報があったため、「その団体から支援を受けるべきなのか」や「誰に繋ぐべきなのか」という事も踏まえて上手に団体からの申し出を受けてくれる、窓口となって頂きました。

また、災害ボランティアセンターは災害が起きてからすぐ立ち上げ・設置をしますが、その後はある程度、収束をさせていかなければなりません。それでも住民の方からの多様なニーズ、要望があり、またそこにボランティアからの要望もある中で、**どの要望を吸い上げ、また他団体と連携していくのか、という取捨選択をするための意思決定には船橋さんのアドバイスがありました。**このタイミングの見極めは自分たちでは難しく、東北での経験があった船橋さんならではのアドバイスだったと感じています。外部の人材ということもあって、私たちでは村内の団体に言いにくいこともハッキリと伝えてくれて、**災害ボランティアセンターと村内の団体の役割分担を創ってくれた**ことありがたいことだなと思っています。

震災発生から半年間の取り組み

Phase3：今後の展開～社会起業家コミュニティの立ち上げ～

震災から半年が経ち、県外の支援団体から地元団体に活動が移譲され始めています。これまでの現地リサーチや出会ってきたリーダーたち、また熊本の若者たちの声を受けて、熊本地震をきっかけとした「新しい熊本の文化」を創っていく、次の展開を仕掛けていきます。

【機会】

➤ 「民間」の力が強い県民性。意欲ある若者たちが震災を機に動き出している。

熊本は、元々「民間（企業）」が強くリーダーシップを発揮し、社会を引っ張ってきた地盤があります。震災時も、経営者たちがいち早く動き出し、避難所への物資支援や様々な災害アプリを利用した支援などを開始しました。経営者同士の横のつながりも強くあります。

また、そうした背中を見てきた熊本の若者たちがこの震災をきっかけに動き出しています。復興のプロジェクトに限らず、浮き彫りとなった社会課題への問題意識を持ち、何か行動を起こそうという機運が生まれ始めました。

【今後の展開】

➤ 熊本の若者を対象とした「社会起業家コミュニティ」の立ち上げ

上記のような機運がありながらも、これまで「地域の課題は民間（企業）で解決」してきた歴史があり、ソーシャルセクター（NPOや一般社団など）の役割は限定的でした。しかし、震災を機に多様な社会課題解決に向けた動きがあり、一般社団法人フミダスおよびNPO法人ETIC.では、こうした動きを加速させていくなから、「社会課題を解決」する人材の育成および課題が継続的に解決されていく仕組みづくりを行いたいと考えています。

そこで、熊本の若者を対象とした「社会起業家コミュニティ」を立ち上げ、ソーシャル・スタートアップ支援を開始します。開始にあたり、NPO法人ETIC.がこれまで培ってきた「社会起業塾」や「ソーシャルスタートアップ・アクセラレータープログラム“SUSANOO（スサノヲ）”」等のノウハウを生かしながら進めていきます。



▲一般財団法人 KIBOWとともに行った「KIBOW熊本」の様子。



▲西原村にて活動する右腕の船橋さんと、受入先団体の方々。



▲「KIBOW熊本」で発表する南阿蘇ケアサービス松尾弥生さん（右腕受入先リーダー）。

震災発生から半年間の取り組み

一般社団法人フミダスが生み出す社会起業家コミュニティ

一般社団法人フミダスでは、継続的に復興プロジェクトに取り組む現地団体として多くの団体と連携しながら復興に向けた一歩を歩んでいます。NPO法人ETIC.では、一般社団法人フミダスの基盤を強化することが復興を力強く加速させていく一手だと考え、フミダスの活動支援を通して復興を支えています。

【フミダスが生み出す“社会起業家コミュニティ”】



1.明日のくまもと塾

熊本が誇る人・もの・文化を元手に、熊本を元気にするプロジェクトを生み出す、2ヶ月間のワークショップ・プログラムです。熊本の未来を創る意欲を持った方々が地域を超えてつながり、切磋琢磨しながら、真の課題を掘り起こし、解決のアイデアを磨き、持続的な事業として立ち上げるまでをサポートします。

主催：明日のくまもと塾実行委員会

共催：特定非営利活動法人JEN

運営事務局：一般社団法人フミダス

協力：九州大学芸術工学研究院・芸術工学府、崇城大学芸術学部、一般社団法人フミダス、一般社団法人まちづくり益城、一般社団法人九州ニュービジネス協議会熊本地域委員会、有限会社ミュージブプランニング、株式会社セレンディピティ、株式会社リ・パブリック



2.KUMAMOTO IGNITION

課題解決に心を燃やす地域リーダーの「火種」を、周囲の人を巻き込みながら「発火」させていくことを目的とした起業家育成プログラム。第一回はゲストに東北から一般社団法人MAKOTO代表理事の竹井智宏氏をお迎えし、『東北に学ぶ！逆境をチャンスに変えた起業家たち』というテーマで講演を行いました。



3.KIBOW熊本

「KIBOW熊本」は、復興の最先端で活躍する熊本のリーダーや団体を応援するイベント。登壇者は5分間の持ち時間でプレゼンを行い、審査員と来場者の投票によって順位＝活動支援金の寄付額を決定し、次の活動に役立てていきます。

主催：一般財団法人KIBOW

運営協力：一般社団法人フミダス

メディア



雑誌『Discover Japan』9月号

熊本復興の担い手を支える事業として、右腕プログラムが掲載されました。



雑誌『TURNS』～Vol.20 2016～

「地方が君をよんでいる」という特集で、右腕プログラムが掲載されました。



KKT（熊本県民テレビ）2016年10月11日（火） 22:54～放送

熊本地震からの復興に向けて歩む熊本について紹介するミニ番組で、右腕プログラムの活動が紹介されました。

その他の活動助成について

一般社団法人防災ガール

ETIC.プログラムOB支援起業家の一人でもある「一般社団法人防災ガール」が震災直後に緊急支援にはいり、現地の調査また避難所への物資支援、配給を実施しました。緊急支援における情報連携、資金提供などを実施しました。

http://bosai-girl.com/2016/05/03/report_kumamoto1/



熊本地震リーダー支援スマートサプライ業務支援

「ふんばろう東日本支援プロジェクト」の創設者である西條剛央さんの展開する「スマートサプライ」は、現地の人が必要なリソース（ボランティア、資金、物資など）を情報をアップし、支援したい人がリソースを提供、WEB上でマッチングされるサービスです。熊本地震直後から稼働したものの、更なる開発、また中核を支える事務局人材が必要となり、1名派遣、活動費の補助など実施しました。



SMART SURVIVOR PROJECT

必要な人に
必要な支援を
必要な分だけ



©2010 熊本熊くまモン#熊本支援

会計報告

【寄付総額】

2016年（10月末現在） ¥38,463,221-

【助成先一覧】

1. 一般社団法人フミダス（助成総額：¥24,997,500-）
2. 一般社団法人防災ガール（助成総額：¥1,000,000-）
3. 熊本地震リーダー支援スマートサプライ業務支援（助成総額：¥86,987-）

【一般社団法人フミダス 会計報告】

震災復興リーダー支援基金（熊本）

助成金執行状況のご報告

（単位：円）

収入					
助成金収入 (2016.4~2017. 4)		24,997,500			
支出					
項目		予算金額 ('16.4~'17.4)	執行実績 ('16.4~'16,10月末現在)	残額	摘要
人件費		11,280,000	6,369,000	4,911,000	
事業費	右腕人材活動費（有償ボランティア費）	8,400,000	1,366,700	7,033,300	右腕4名に対し活動支援金を支払(7月~)
	団体支援金	700,000		700,000	
	旅費交通費	780,000	657,860	122,140	福岡、仙台、東京島出張旅費
	講師謝金	120,000	0	120,000	
	講師旅費交通費	240,000	0	240,000	
	広報費	1,100,000	226,904	873,096	WEB制作費、説明パンフレット制作等
	会場費	105,000	0	105,000	
		11,445,000	2,251,464	9,193,536	
一般管理費（事業費+人件費）×10%		2,272,500	1,136,250	1,024,647	
合計		24,997,500	9,756,714	15,240,786	

